名桜大学総合研究, (22):77-94 (2013)

名桜大学総合研究所創立15周年記念事業

「地域貢献に対する大学研究所のあり方」

第２部　シンポジウム：「地域貢献に対する大学研究所の役割」

シンポジスト：清成　忠男（公益財団法人沖縄協会会長　元法政大学総長・理事長）
勝方＝稲福　恵子（早稲田大学　琉球・沖縄研究所 所長）
池松　真也（沖縄工業高等専門学校 地域共同テクノセンター 所長）
緒方　　修（沖縄大学 地域研究所 所長）
小川寿美子（名桜大学 総合研究所 所長）

【小川氏】

まずは、お三方の研究所もしくはセンターの長をしている立場から、現在、どのような地域貢献をしているかというお話をしていただきまして、その後、清成先生、勝方（＝稲福）恵子先生そして、シンポジストの先生方また今回参加して下さっている皆さんも含めてディスカッションをしていきたいというふうに思っております。では、まず最初に、池松先生のご発表の方をよろしくお願いします。大体20分程度で、±５分位で大丈夫です。よろしくお願いいたします。

【池松氏】

池　松　真　也

こんにちは、沖縄高専の池松と申します、宜しくお願いします。沖縄高専はですね、研究所というようなものがなくて、それと今日ちょっとだけ自分が浮いていると感じるのは、私だけ理系なんですよね。それで、ちょっと浮いているような感じがします。私も沖縄に来ましてやっと７年目です。１期生の時に担任を務めまして明日が卒業式・終業式で、やっと４度目の学生を卒業させるということで、まだまだ新しい学校です。そういう意味で地域に対して、まず学校を認識してもらわないといけない、学校を知ってもらわないといけないということから始めています。

まず、最初に、沖縄高専の紹介をさせていただきます。沖縄高専は辺野古の丁度、キャンプ・シュワブに隣接するようにありまして、このような学校になっております。ここが学生が授業をする教室、その反対側に実験室が並んでおりまして、建屋が変わって夢工場、ここでは学生たちがロボコンのロボットを作ったり、試作品レベルで物が作れるような工場があります。その横がジムですね、体育館があって、その屋上にはプールもあります。こちらが事務棟とレストラン、ここは丁度、辺野古のきれいな海を見ながら食事ができる、すごく幸せな環境のレストランです。ここが寮なのですけれども、国道を挟んで寮がありまして、皆様に向かって手前側が男子寮、こちらの奥側が女子寮になっています。ブリッジを渡って学生は、１～２年生までは全寮制ですので、毎日このブリッジを渡ってレストランに行って、朝ご飯を食べて、お昼ご飯は授業が終わって食べて、夕ご飯はまた寮から食事を食べに行くというような感じで、ここの中に英会話の教室や図書館等もあります。これが温室で、熱帯に属するような植物を植えたりして研究材料にしています。沖縄高専は４つの学科から成っていまして、機械システム工学科、情報通信システム工学科、ここから右側は全国に統廃合が進みまして、それでも51の国立高専がありますが、その中でも沖縄高専にしかない学科というのがメディア情報工学科と生物資源工学科です。高専の教育体制といいますのは、中学を卒業した16歳くらいの子供たちを受け入れて、５年間の一貫教育を行います。丁度、短大くらいまでのレベルになるという事ですね。一般高校では一般科目だけを勉強して、大学に進んでから専門教育を受けるということなんですけれども、高専の場合には高校生のレベルから専門科目をずっと習いながら５年間教育を受けていくということで、５年目には大学で行いますような卒業研究を行います。その後２年間の専攻科というのがあります。つまり専攻科まで行くと丁度、大学卒業と同じ資格になりますので、そのまま大学院に行けるということですね。本学からも３年次編入で大学に行ったり、勿論就職したりします。そのような進路を取れるのが高専という教育システムです。

今日の本題に入りますが、地域共同テクノセンターという私たちのセンターは、地域に密着した便利な施設でありたいというような理念に基づいて運営させていただいております。その活動内容としましては、産官学の連携、地域との連携、特許と研究などを積極的に行っていこうということでやっています。産官学連携につきまして、幾つか事例を挙げさせていただきます。１つは毎年11月に那覇のロワジールホテルの方で沖縄高専フォーラ

ムというのをやっています。これは主に産・学ですね。お互いが色々なことを情報交換して、勉強しましょうという会で、今年度のテーマは「知的財産について」ということで、本土から商標や特許の専門家の方をお招きして、知財についての勉強を一緒に行いました、これはフォーラムです。また、１年に１回名護市を中心に北部の方でフォーラムを開催しています。今年度は２月24日に生涯学習推進センターの方をお借りいたしまして、鈴木先生にご迷惑をおかけしたのですけれども、このフォーラムを行いました。これは生涯学習と産学連携というテーマで行いまして、うちの教養課程・総合科学科の先生たちに色々話してもらいました。機械科の先生にはロボットの話をしていただいて、今回のような震災の時にロボットがどういうふうに役に立つかとか、情報系の先生は震災の時に情報っていうのがどういうふうに活用できるのかとかですね、そういう話をしていただきました。それ以外に、九州地区の高専でフォーラムをやっていまして、昨年度は初めて海を越えて、沖縄高専でフォーラムをやりました。このような形でシンポジウムを、琉球大学の和田先生などにも来ていただいて、色々活発に行うことができました。

他の産学連携ということでは産業まつり、沖縄の産業祭り、山原の産業祭り、色んな所で産業祭りがありますけれども、そういった行事に積極的に参加して、そこで沖縄高専はどんな学校で、どんなことに貢献できるかというようなことを積極的にお話させていただいて、宣伝させてもらっているようなことをやっています。これは那覇の産業祭りで、うちの学生がロボットスーツみたいなものを開発して、それを実際に動かしてみて、子供たちや地域の人たちにすごく楽しんでもらったという例です。これがうちの校長先生が発明した爆破レンジという機械で、テレビ等でも最近盛んに出ていますけれども、衝撃波を使って、例えば丸々１個のりんごをこのレンジの中に入れて、パンっと衝撃波を与えると、外側のりんごは何も変化はないのですけれども、それにストローを刺すと中はジュースになっているというような装置です。この装置をいかに応用するかというのがこれからの課題で、いつまでもりんごを撃ってるわけにはいかないので、何に活用するかというのを今、学校を挙げて一生懸命考えています。本当に不思議な装置で、これを電子レンジのようにしたいというのが伊東校長先生の目標で、例えば、大根を切ってだし汁と一緒に袋の中に入れてこのレンジの中でバンっと撃つと、２～３日炊き込んだようにすごく美味しい大根の煮物が出来るんです。それは、熱をかけないで出来るので、その後電子レンジで温める必要があるのですけれども、そういう装置です。子供科学教室なんかも産業まつりに合わせてやらせていただいています。例えば、那覇や名護の産業祭りでは、子供科学教室として玉葱から DNA を取ろうということで、DNA というようなことを小学生に説明しています。

次は、地域との連携についてです。これは出前授業ですね、私たちは年間30件以上の出前授業を行っていまして、離島にも行っています。今年度は例えば本部町の小中学校、それから大北小学校ですね、あと離島にも行きました。大体、沖縄県中くまなく、全部に行くように努力しています。それは年度初めに、各小中学校にうちの教員ができそうな講義内容を書いたものを郵送して、「何時頃、どんな学年にどういう授業をしてほしいのか」という返事をいただいて、その中でできるだけ重複しないように選んで、私たちの方で出て行って授業をするということです。最近は、大北小学校のようにバスで生徒さんに沖縄高専まで来てもらって、沖縄高専の設備を見てもらったりしながら、沖縄高専の設備を使って小学生に授業を受けてもらうというふうなことをやっています。これは、「何でホタルは光るのか」というのをやって、すごく子供たちが喜んだ出前授業です。今これはセンターの事業ではないのですけれども、沖縄高専でやっていますのは、「オールやんばる・科学と教育のまちづくり」ということで、名護市を中心にネットワークを組んで、東江小学校の近くの方にサイエンスランドというのをオープンして、そこをほぼ一年中オープンして、子供たちがそこに来て研究を見たり、勉強したりできるような設備を整えて、とにかく科学に親しんでもらおうというようなことに取り組んでいます。これは JST からお金を頂いて、約３年間やる予定です。

３つ目が共同研究、これがやっぱり地域から一番期待されていることだと思います。特に、私たちは理系ですので、理系としてできることがあると思います。これが共同研究の事例で、（私の事例なんですけれども、）ある企業様と亜熱帯資源を利用した研究ということで、沖縄には他府県にはない珍しい亜熱帯の、特に海洋資源というものがあります。そういったものを利用して、私はがんの研究が専門ですので、がんを治すような治療薬を見つけることができないかというようなことを学生と一緒にやっています。またそれ以外にも、例えば沖縄の生物資源から取り出したものを付加価値を付けて製品化するというようなことができないかというようなことを企業様と一緒に研究し、それを企業様に商品化していただくというようなことのお手伝いをさせていただいております。これは一つの例なんですけれども、沖縄のパイナップルから単離した乳酸菌、たまたま乳酸菌を単離したのですけれども、それが新しい乳酸菌で、勿論ヨーグルトを作ることもできるんですけれども、日焼け、色が黒くなるのを防止するというような機能を持った乳酸菌でしたので、日焼けを止めることができるヨーグルトの開発とか、これを化粧品の材料にして開発していくというよ

うなことを企業様に提案して一緒に開発していこうといったようなことをやるのが共同研究ですね。そういったことを一人一人の教員が、今４学科ありますけれども１学科あたり12～13名の教員が学生を指導していますので、4学科で50～60人教員がおりますので、その教員一人一人のできること、お手伝いできることというのをまとめて、毎年こういう「シーズ集」というのを発行しています。これを企業様とか市民の方々に色々な産業祭りの時とかに配布させていただいて、これは私のページなんですけれども、こういうのを見ていただいて、「興味がありましたら、連絡してください」ということで配布させていただいて、何とかお手伝いができるような環境を作ることができないかというふうにしています。

ここは、私の仕事の話なんですけれども、先程申しましたように、私は専門ががんの研究ということで、たまたま大学院の時代にミッドカインというものを研究室の中で発見し、これを色んながんの患者さんの血液中で測るシステムというのを作って、実際に測ってみると、ある値よりも高い値の人はみんながんなんですね。例えば食道癌・胃癌・十二指腸癌・大腸癌・肝細胞癌・乳癌等々、色々ありますね。そうやってこれを測ることで大体90%こっち側に来ているんですね。だから90%の確率でがんかどうかを見分けることができるということなんです。そういった測定系を開発しましたので、そういったものを何とかお役に立てないかということで、今学生と一緒に研究を進めております。これは県が大学院大学、恩納村の沖縄科学技術大学院大学、OIST ですけれども、OIST ができるにあたって先端技術高度化事業というもので、次世代シーケンサーというのを県で３台購入した時に私も仲間に入れていただいて、研究をやったときのパワーポイントです。その私の研究しているものを利用して、一つはがんの治療薬の開発ができないかということで、そのがんの治療薬の開発について製薬企業や研究所を誘致できないかということと、診断技術を上手く開発しましたので、県の長寿対策に利用していただけないかとかですね。また、ミッドカインはがん細胞が出しますので、例えばこのやんばるの地で栽培されている野菜の中で、ミッドカインが出てくるのを抑えたり、邪魔したりするようなものがないかというのを探すことによって、もし見つかればそれはガンを予防するような食材になるということで、通常100円というものを200円以上で売るというような、付加価値を付けるのに利用できるというふうに考えます。そういったことに寄与できないかということで、この研究を今、学生達と一緒に進めています。以上こういったことが私達の県に対してやっている地域貢献の内容なのですけれども、先程お話しましたようにできたばかりの学校でして、今、模索中です。

どういうふうにやれば、本当に県や県民の方や市民の方に役に立つようなことができるのか、ということをまだ考えている最中です。これからも色々なご意見を頂きながら発展させていければいいなというふうに考えています。どうもありがとうございました。

【小川氏】

池松先生どうもありがとうございました。引き続きまして沖縄大学地域研究所の所長、緒方修先生、宜しくお願い致します。

緒　方　　修

【緒方氏】

宜しくお願い致します。沖縄大学は52年の歴史を持っておりますが、地域研究所は22年前にできた研究所で、初代の所長が宇井純先生という有名な公害の権威です。ずっと東大の助手だったのですが、東京大学の中で市民に開かれた講座を開くんだということで「自主講座」という講義を始められまして、当時のドキュメンタリーフィルムなんかを見ますと大変、活況を呈しています。沖縄に来られてからもそういうのを是非やるべきだ、つまり大学ではできないようなこともどんどんやるべきだということで、初代はそういう感じです。２代目が新崎盛暉という沖縄近現代史の有名な方ですね。それから高良有政さん、それから比嘉政夫さん、それで私は５代目なんです。大体平均５年くらいずつやってまして、私も大変なので辞めたいのですが、まだ辞めさせていただけないということでございます。初代の頃は非常に良かったのですが、次第に研究ばかりに偏って、ちょっと問題だなと思ったことがあります。

それは TBS でやっている「運命の人」というのは日曜日ですか？ご覧になっている方もいらっしゃると思いますけど、あの中に外務省の北米一課長、吉野文六さんという方が実は密約で BY とサインしているわけです。（これは十数年前に研究者仲間に対して、オーラル・ヒストリーという英語も最近ありますけれども）、極めて小集団に対してあれは密約なんだと語っておられるんですが、それはあまり表に出なかった。暫くして私の知っている女性のディレクターが吉野文六さんに長時間インタビューをして、「密約ということを認めているので、それを是非、地域研究所の何かに載せたいんだけれどもどうですか」と、「それは是非下さい、密約を暴くような文書であれば、沖縄のあらゆる大学の研究所がほしがるはずだ」と言って、私はそのレポートを貰いました。地域研究所に出しました。却下されました。これは論文ではないと。考えてみて下さい、例えばレオナルド・ダ・ヴィンチの史稿が出てきたとしますよね、これを論文で

ないと断るでしょうか。要するにその時の状況は、悪口になっちゃうんで控えますけれども、判断停止と言うのか、密約の本人からお話を聞いて、それをハイと大学に持ってきた、これは論文ではございませんと言って断るとは何という連中だと、こういう研究所とは二度と付き合うまいと思って、実際付き合いませんでした。

そうしたら図らずも４年前に、私も学部長が終わってさあ後３年間は何もしなくて済むかなと思ったら、また選挙で選ばれちゃって、それ以来３年やってまた２年延ばして後１年ですけれども、やっているというのが今の現状でございます。私は元々文化放送という放送局にいまして、非常に分かりやすく言うと「みのもんた」というバラエティーの人が１年先輩なんです。それから土井勝だとか、以前には中村雄二郎（哲学者）とか色々いたりしましたけれども、そういうミーちゃんハーちゃんの最先端みたいな所にいて、何か起きたらすぐやるというのは、私の習性として身についているわけなんです。つまり考えも何もしないで、さっと走ってしまうんですね。そういう習性は、研究所の所長になってからもある程度反映しているんじゃないかと思います。かなり反映していると言ってもいいかも知れません。つまり研究はそっちのけとは言いませんが、地域で何が必要とされているか、あるいはニュースに敏感に反応し、大学が果たすべきことは何なのかということをどんどんやっちゃったほうが早いんじゃないか、というようなことでやってきました。たまたま昨日職員の方に、今年度やった土曜講座をパワーポイントに取り入れておいてくださいと言ったら、容量がオーバーするくらいにいっぱいありまして、こんな形になりました。

これは、３月11日の大震災の後、４月23日に緊急報告を致しました。ポスターの一番上にありますのは、照屋さんという沖縄県の特別消防隊でここ（被災地）に行った方なんです。行った方を私は見つけて、悪いけど出てくださいと言ってこれもすぐ出てもらいました。それから２番目が防災キャスターという私の古巣の文化放送、この人も世界中地震があると飛び回っている。それから沖縄大学のお医者さんで、これは妹さんも一時行方不明ということでしたが、無事見つかりました。それから４番目に稲垣暁さんという特別研究員。（私どもの研究所は特別研究員がなんと185名もおります。）私も３分の１くらいしか知りません。70人の専任教員がいて、他の185人が特別研究員。このポスター（※写真なし）は前の台湾の副総統の呉栄義さんでございますけれども、この方が講演するので沖縄大学で台中関係をテーマにやった。これは、琉大の島袋純さんとかですね、それから琉大から移ってこられました仲地博さんが、独自で「沖縄の自律と自立の構想」というのを色々まとめまして県知事に提出しておられてました。これは尖閣列島の問題が起きまして、上田不二夫さんというコメンテーターがいらっしゃいますが、鰹の専門家ですね。それで天皇陛下と同じ研究者仲間で４～５回一緒に食事をしたとか威張ってましたけれども、尖閣諸島について。これは石垣金星さん、西表でずっとやってらっしゃる方で、この人は４時間半くらい喋りましたかね。最後は三線弾いて、大変面白かった、録画まで撮って教材にするべく今やっております。石川淳さんという有名な作家がいらっしゃいますが、そのお孫さんで石川直樹さんという写真家がいらっしゃって、エベレストに行ったりとか色んなことやっていますけれども、その方を中心にお話をしてアウエハント静子さん、柳田邦男の弟子のコルネリウス・アウエハントさん、波照間島の研究なんかをやってた方の奥様でございます。これはシリーズでやってるんですけれども、生物多様性シリーズですね。これ見ると一月に２回ずつくらいやってますね。

これは「世界遺産」で、私がやったのでよく覚えてますけれども、12年前（西暦2000年）に沖縄が世界遺産に登録されましたが、果たして今帰仁とか中城とか、そこまで皆さん足を伸ばしますかといったら、あまり行きません。逆に、斎場御嶽などは世界遺産登録以前は１万2000人しか入らなかったのが、現在なんと35万人、オーバー・ユースで、石畳のこっち側に土嚢が積んであり、ハイヒールで破れたりと、そういう状況なんですね。何

とかしないといけないというようなことでございました。それで私がたまたま去年サンチャゴに行きましたので「サンチャゴ巡礼について」報告しました。サンチャゴというのはとても面白い所ですね。キリスト教の３つの巡礼地の内の一つですけれども、ここに未だに、10万人くらいの人が歩いて来るんですね。13万人くらいの街だったかな。サンチャゴ大学で３万5000人います。大学生が３分の１くらいを占めているわけです。数年前の何かの記念の年には400万人～500万人が来ています。僅か13万人の住民のところに、美術館・博物館が17個くらいありましたね、小さな美術館ですけど。みんな大変面白い、僕も全部回ったわけではないですけれども、そういうのがありました。これは「琉球諸語の復興」です、これも３回くらいのシリーズで本にするつもりです。私どもの研究所は、叢書を全国版で出しておりまして、今５冊くらいになっています。

これは日露歴史研究センターという大変難しい人ばかりで、しんどいメールを十何回やりとりして、実現させましたけれども、これがなんと170～180人くらい来ましたかね、（ゾルゲ事件が）こんなに関心あると思いませんでした。これは琉球弧 CATV サミット、私が得意のメディアの方でございますけれども、奄美、宮古、石垣の各 CATV の方をお呼びしてお話ししました。これはアイヌ語の、これなんか全然お金かかってないんです。向こうの財団が全部出しますということで、こちらはポスターだけ作って当日職員を派遣した。ポスター自体は100枚くらい作って、チラシを2000枚くらい毎回作ってるんですけれども、それを沖縄中に配っておりますので、毎回毎回こういうのが色んな所に貼ってあるわけですね。これも龍谷大学の松島泰勝さんという沖縄問題をよくやってらっしゃる方なんですけれども、その方にほとんど全部費用は出していただいた。

それで、今年の講座は原発とメディアに絞ってちょっと詳しくいきます。自由報道協会というのが最近あって、要するに記者クラブの問題は何だと、こういうのがある限り日本のマスメディアも良くならない、民主主義も良くならない、簡単に言うとこういう主張で、私もその通りと思っているのですが、これを唱えている畠山さん、（上杉隆さんとがトップですけれども）、その畠山さんをお呼びして、下の方にありますのは玻名城さん、琉球新報の論説委員長です。岡留安則という問題のサングラスを掛けている怪しい男、昔「噂の真相」という雑誌の編集長でした。私の友人なんです。それから司会は慶田城さんという、琉球新報を辞めたばかりのジャーナリストです。辞めたばかりの人が何とか地域に恩返ししたいと、沖縄大学出身ですから、講義を持てないかと。丁度、私はジャーナリズム論をどうしようかと思って、「どうぞよろしく頼みます」と言って、カメラマンと仲田さんという人と３人にお願いして集大成をやったわけであります。次は、「琉球の諸語の復興」の３回め、これはやはり人が来ましたね。

照屋寛徳、宮良康生、大工哲弘、天久勝義さん、「シ

マの言葉で喋ってくれ」と注文つけまして。首里語だったら首里語で喋ってちょうだいと。２年前、UNESCO が日本の危機に瀕する言語を、八つの言語について指定いたしました。アイヌ語、八丈語、あとは全部、琉球圏内。つまり、奄美語、国頭語、沖縄語あと３つの島です。奄美までは及びませんでしたけれども、それを、ただ、こういう言葉ですよっていうのではつまらないから、先生方には歌でも唄っていただいて、その言葉も全部、比べていただく、挨拶とか全部です。まず、照屋寛徳さんは首里語、宮良康生さんは与那国語。大工哲弘さんは八重山。天久さんは宮古ですね。照屋寛徳さんが喋っている間は、半分ぐらいの人は分かってました。笑ったりしてましたね。与那国語、宮古、八重山は、誰も分かりません。「ああいうとき、字幕かなんか用意できませんかね」と言われました、「それは先生、何喋るか分かりませんからね」とお答えしておきました。ただ、録画を撮ってあります。その前の説明ですが、ハワイ語、カタロニア語ってのは、実はワンジェネレーション、30年で復活してるんです。ですからこの司会の比嘉バイロンていう方は、もう燃えてるんです。琉球諸語の復興ということで、それで何とかしたいといって、私の所に来たんです。

打ち合わせの平均時間が２時間。それで月に５回ぐらい重なってますから、書いた方が早いんじゃないかと思いました。これも全部テープを起しまして、日本語の標準語を付けて、それでなおかつ、学者の方、研究者の方４

人ぐらいに執筆をお願いしております。与那国とか、発音がどうのこうのとか言う細かいことを入れまして、研究者にも恥ずかしくないような本にして、８月頃に出版できると思っております。(2013年２月出版予定)

これはアイヌのことでしょうか。人はあまり入りませんでしたね、残念ながら。次は３月11日に前の学長の桜井さんが企画したんですけど、何か音大の先生だとか、この人はチェルノブイリの被爆者なんですが。それで2500円という途方もない受講料金なんですけど、確か、満杯じゃなかったのかな。だから赤字を出さずにすんだ。３月11日のイベントとしては非常に異色のイベントでよかったと思っております。

これからちょっと詳しく説明しますけれども、移動市民大学というのを年に何回かやっているんですけど、このときは久米島でやりました。久米島高校とは提携も結んでるのですが、久米島高校は、例えば園芸科がコースに切り替わって、半分取り潰し状態みたいなことで、大変危機感を覚えておられる訳です。そこで、「助けるために何かやりましょう」と。それで、移動市民大学をやる場合には、高校側にも必ず何か発表してもらっています。宮古島でもそうです。宮古島の場合は、宮古総合実業とか宮古高校とか、宮古工業、大変素晴らしい研究やってらっしゃいますので、そういう人達が前座で色々な発表をする。後半に我々が企画してきたゲストがお話をするというふうなことで、高校と大学を連携させたようなプロジェクトとして捉えています。これは、久米島ホタル館ですが、ご存知でしょうか。これを知らなかったら、是非、覚えておいていただくといいと思います。素晴らしい活動をしておられます。久米島のホタル館のホタレンジャーというのが15人ぐらいいるんですが、小学生から高校生までのメンバーが一生懸命、久米島蛍っていう、非常に珍しい蛍を復活させています。「農薬とかは、悪いけど止めてちょうだい」と、２年ぐらい経ったら、本当に、そこの水が綺麗になって、蛍がそこで見られるようになった。今は、何100匹も復活させてます。この高校のボランティアが沖縄大学と一緒に、ペットボトルのキャップを集めて何か、ワクチンに変えるとか、やってました。

後は、講演会、対談、これは移動市民大学の一つの典型であります。高校と組む、それから地元の研究をやってる団体と組んで、久米島の皆さんにもお知らせする。ここは「教育立島」と唱えてやったわけですけれども、うまくいったか分りませんけれども、非常に注目すべき講座だったと思います。

実は、沖縄大学地域研究所の目玉の一つに、ジュニア研究支援発表会というものですが、奄美まで含めて申込みがあります。理科系が結構多いんですけれども、もちろん理科系に限りません。大体10件ぐらい採用しています。５万円づつ援助を離島も全部同じようにやっています。特徴的なのは、発表会の時に先生と生徒と両方呼ぶんですが、交通費の方がよっぽど大変なんです。ジュニア研究支援というのは、10年続けています。これは、緑の地球防衛基金というところから、毎年150万円づつ補助していただいていますが、そろそろ打ち切りになるような感じで、ちょっと、どうしようかって考えているんです。

奄美の龍郷町から来た子供達が発表しています。これは贅沢と言いましょうか、南西地域活性化センターというのがございまして、そこのシンクタンクに知ってる人がいて、年に一度、奄美と交流をしていて、先生一緒にやりませんかという声が掛かった。最初の３つ「沖縄大学の学生による奄美だよりインターシップ体験報告」、「奄美の高校生と沖縄大学生のディスカッション」と書いてありますが、150人ぐらいですね。高校生にアンケートをとったんです。すると、圧倒的に奄美に帰りたいという人が多いんです。しかも、奄美が好きだという人が多い。おそらく沖縄も大体同じ傾向だと思います。こういうアンケートは、あまりないと思うんです。それを元に番組を作って10分ぐらいの番組でしたけれども、学生達と地元の高校生がいろんなディスカションをする。次

は、さっきの各ケーブルテレビ。ケーブルテレビですから、映像も音もあります。Ｕターン、Ｉターンによる地域活性化ということで、石垣と宮古の実例を、例えばＵターンで戻ってきたとか、Ｉターンでいらしゃったとか、そういう人たちを実際に映像にしたやつを５分づつぐらい発表する。

それからこれは、たまたま石垣の商工会のやってることなんです。非常に、奄美の人が人注目しております。それで石垣市の商工会の事務局長の平田さんという方をお呼びして、その話をしてもらいました。さらにサービスで藤木勇人が来てるということで、何と贅沢な講演会、シンポジュウムであろうかと思いますけれども、つい最近やった訳です。

大体時間ですね。ちょっと繰り返しになりますけれども、大学の教育というのは、例えば地域とか離島とか地元の企業とかNPOとか商店街とか、そういうところと一緒にやらないと、教育が成り立たないんじゃないかと強く思っています。何故僕がそう思ってるかというと、もともと僕は、大学の研究者でも何でもない。たまたま放送局という所に29年居りまして、何かあったらすぐ動くという、頭で考えないで足から先に動かないといけない。そういう習性が身についております。大学の教授としてきたときに、学長に申し上げたのが、「私はこれから勉強します」と言ったら、苦笑いされていましたけれども。要するに、現実に起こってることを、現実に関わりながら、学生を育てないといけない。そうすると、大学というのは、変質を迫られてるわけです。さっき、社会のニーズとかいう話はありましたけれども、一体、ニーズに応えられているのだろうか。応えられていなければ、こちらが変わるしかないじゃないかと強く思っているんです。しかし、どうも先生方と職員はそうでもない。「そんなことは難儀」とか言ってですね、やらない。そういうことは、誠によろしくないと、唱え続けているわけでございます。さらに、一言申し述べますと、私はもうすぐ定年も近いんですけど、できればその、アジア・ネットワーク大学機構みたいな、清成先生がお考えになり、お創りになったNPO三鷹ネットワーク大学機構、20の大学と90の機関が入ってるということで、大学ではできないようなことを沢山やってらっしゃると聞いてますので、私も小規模ではありますが、そのようなものを立ち上げて色々やっていきたいなと思ってる次第であります。ご静聴ありがとうございました。

【小川氏】

緒方所長、どうも有り難うございました。引き続きまして私の方から報告させていただきたいと思います。

小　川　寿美子

【小川氏】

まず、今回ご参集いただきました先生方に、総合研究所の創立15周年記念事業でご発表いただきたいと思った経緯を簡単に説明させていただきます。私が名桜大学総合研究所の所長に任命されましたのは、今年度、約１年前のことです。所長になり数ヶ月経った頃、琉球大学から一通の手紙が届きました。「実は毎年、沖縄研究大学連合の集まりがあり、所長職の方、是非ともお越しください」という文面だったと思います。忘れもしない７月16日、大学の研究所所長が集まるから、ちょっと堅い会議かと思ったら、とある居酒屋で行なわれたんです（笑）。そこで初めてお会いしたのが、今回コメンテーターとしてご参加いただいている勝方（＝稲福）恵子先生でした。また緒方先生とは、県庁で何度かお会いしたことがありました。とにかくその場で県内外の多くの沖縄研究所の所長が参加されていました。その中で、勝方（＝稲福）恵子先生が３月29日から３日間、「復帰40周年沖縄国際シンポジウムーこれまでの沖縄学、これからの沖縄学ー」を開催するので、主催者として参加して下さい、という呼びかけがございました。初めてお会いした勝方（＝稲福）恵子先生でしたが、物腰は柔らかいなかにもすごく芯の強さを感じました。男気でなく"女気"のあるところに非常に惹かれました。

そんな繋がりがあり、かつ今年度は研究所の所長として15周年記念事業を企画するという責務があり、どういう内容にしようかと考えあぐねていました。創立10周年の時には、研究所の歴代所長がシンポジストとして、前に並んで、今まで研究所はこのように立ち上げ、このような目標がありました、というような話があり、それはそれで素晴らしいものでした。しかし同じものを繰り返すわけにはいかない。「どうしたらいいかな」という思いをもちつつ、「沖縄学」を通じて色々な先生と繋がりの非常に深い稲福恵子先生にご相談申し上げました。そして、すぐに返ってきた答えが、「清成忠男先生に連絡を取られたらいかがですか」とご紹介を受けました。法政大学の総長・理事長をなさっておいでになる、ということは存じ上げていましたが、沖縄との繋がりがあるとは、実は、知りませんでした。そこで私は、まず清成先生について色々と勉強させていただきました。清成先生はさまざまなご著書があるのですが、大学関連では、

「現代日本の大学革新」という本がありました。まずはこれを買おうと思いアマゾンにインターネットでアクセスしてみたら、中古の本のみ入手可能でした。新書は定価は3500円にもかかわらず、何と中古本が１万8000円でした！それほど需要が高いということを知ったのです。そのため、その時点では他のご著書を取り寄せて、拝読させていただきました。

また、稲福先生の方からは、清成先生の連絡先も教えていただきました。初めてお電話差し上げる時は、ドキドキしながら、とある金曜の午後だったと思うんですけど、受話器を握っていました。恐らくお電話してもいらっしゃらないだろうなと思いながらもお電話差し上げました。そうしたら、何と、清成先生ご本人が出られたので、私は必死になって清成先生を招聘させていただきたい思いを語りました。そういたしましたら、「３月なら、まだ予定入ってないからいいよ」というようなことで、話がとんとん拍子に進んで行きました。それと同時に、やはり県内の大学の研究所長の方、それからセンター長の方にも少しずつお声を掛けさせていただきました。今回、お声を掛けさせていただきながらお越しになれなかった琉球大学の我部正明先生、沖縄国際大学の上原静先生は、どちらもご出張や卒業式と重なっていて、お越しいただけないということでした。清成先生をはじめ、先生をご紹介いただいた勝方（＝稲福）恵子先生。そして、同じ名護市にある沖縄高専のセンター長、池松先生、そして緒方先生等、このようなけの先生がたを今回お迎えできて、私は非常に有難く思っております。

次に早速、私の発表に入らせていただきたいと思います。

まず、私の報告では主に４つの事について触れさせていただきたいと思います。まず一つは、名桜大学の総合研究所の軌跡です。今回15周年記念ですが、実は、私、名桜大学に赴任してまだ６年がようやく経とうとしているところです。それ以前の９年間の経緯を直接知らないので、今回色々と勉強させていただきました。それを掻い摘んでご紹介さし上げます。次に、今、総合研究所が行なってる主な事業の紹介、そして、地域貢献に対する研究所の役割としてどんな地域のニーズがあり、そして大学からはどういうような要求、もしくは期待があるのかという順番でご紹介いたしたいと思います。最後に、私自身の総合研究所に対する思いを皆さんにお伝えしたいと思います。先程、開会の辞で嘉数理事長が少し触れていましたけれど、「ヤンバルにおける知的ネットワークのクロスロード」を目指すのがいいのではないか、という私の考えをご紹介させていただきたいと思います。

まず、名桜大学総合研究所の軌跡についてです。名桜大学は、公設民営の大学として、平成６年に開学致しました。その２年後に、名桜大学の総合研究所が設立されております。その頃は大学院を設立するという計画があり、当時の４つの大学院の研究領域に準じて、部門を研究所の中に設置し、そしてその４部門が研究の要になるような意図のもと、この総合研究所が設立されたというふうに伺っております。例えば、言語文化部門、経営情報部門、社会政策部門、それから観光環境部門ですね。そういった部門が設立されました。その４年後に研究所、つまり今、私たちが使っている２階建の棟が名護市の予算を受けて新築されたと聞いております。歴代の所長は一代目が小谷先生、それから二代目が山里先生、三代目が仲地先生、（本日お越しになって頂きまして有り難うございます。）四代目が西平先生、五代目が再び仲地先生、そして六代目が新垣先生、そして今七代目ということで小川が就任しております。研究所の運営ですが、現在所内スタッフということで併任教員の所長として小川、そして副所長として田代が、毎週一回開催される所内会議に出席し、運営の細かいところをサポートしています。また、運営委員会いうのが設立されておりますが、現在は、４部門から２部門増えて、人間健康学部という新しい学部が設立されたのと同時に創られた部門ですが、ここにも書かれてますように、健康科学、看護科学という新しい部門が設立され、各部門から２名ずつ部門長そして部門委員を選出してもらい、運営委員を構成しております。研究員としまして、特別研究員として西平先生、客員研究員が、先程、勝方＝稲福恵子先生のお話にもありましたように、土肥直美先生という沖縄の人類学、骨の研究者として著名な先生が琉球大学をリタイアされた後、こちらに客員研究員として赴任して下さったり、長寿の研究で大宜味村をフィールドになさっている平良一彦先生も、琉球大学をリタイアした後、客員研究員として登録して下さったりしています。その他、共同研究員、自主研究員がおりまして、現在研究員は８名になっております。

主な事業は、公開講座、地域出前講座、シンポジウム・講演会などの主催・共催、産官学連携事業。その他、研究員の受け入れ。研究費の管理と奨励、例えば文部科学省の科学研究費、それからこの研究所が助成する特別研究費（１件）、一般研究費（平均７件）です。それから外部資金の管理、奨励、その他、紀要の発行です。まず、公開講座は、事業報告書とお配りしたＡ５の小さな冊子でいうと、２ページ目から８ページ目にあたります。件数は今年度で28件で、来年度は約倍の46件に増えます。その構成は、専任教職員が講座のテーマ、開催日時、場所を設定し、広報は研究所発行の冊子を通じて、また名護市の広報誌にも掲載したり、大学のウェブページに載せます。参加費は無料ですが、一部実費負担もあります。この公開講座が現在、総合研究所による地域貢献の核となっております。

次に、地域出前講座に関して説明します。今年度の申請件数は18件です。これは、実は昨年度より開始した事業です。各市町村を訪問した時に、「職員研修に使える内容を提供してもらいたい」「教員のほうで、どのような講義だったら提供できるかをリストアップしていただけると非常に助かる」という相談がありました。ちょうど公立大学法人になったばかりの名桜大学ですので、これは、教員の先生方にお声掛けをして、協力を呼びかけることとなりました。公開講座と違うのは、専任教職員が、相手側の指定した場所と時間に、出張するというものです。申請方法はファックス、電話、Eメールで、講師料は無料です。これも地域のニーズに応じた地域貢献ということで、これからもどんどん件数は増えていくのではないかと思っております。

それからシンポジウムおよび講演会の説明をいたします。部門が先程６部門あると言いましたけれども、今年度は、３部門の発表がございました。国際シンポジウムは４件、「これまでの沖縄学、これからの沖縄学」へのセッション企画も含めて主催させていただいております。それから、講演会１件、共催ワークショップに関しては、サンゴのワークショップで西平先生が行なう海洋博記念センターとの共催が３件。今後の課題としましては、まだまだ、シンポジウム、講演会に関して、総合研究所は件数が少ないということと、参加者集めが困難だということです。何処に情報を提供したら人が集まるのか、もしくは関心のある人に、情報が提供でき、アウトリーチできるのかというところが、まだ私達の課題になっております。

それから産官学連携事業の件数は、沖縄高専に比べたら非常に少なく、年間２件です。まず１つは「第35回沖縄産業祭り」に展示させてもらいました。もう一件は「沖縄産官学イノベーションフォーラム」で、発表と展示をしました。また、環境にも健康にも優しいという観点から、「自然エネルギーを利用した調理の薦め」という発表を私がいたしました。発表後、ある泡盛企業から「ソーラークッキングはこれからの時代にマッチしており、特に東日本大震災後、エネルギーのことについて、今まで以上に見直さないといけない気持ちになってる。是非ともソーラークッキングを商品化し、そこで環境教育や食育もプラスしていきましょう」という話がありました。そのため今後産学連携に発展するかもしれません。

産官学連携の課題は、我々の連携件数がまだまだ少ない点です。それから、こちらとしても産官学連携のためにも、我々教員が地域にどのような貢献ができるのかということをわかりやすく発信する必要があります。実はこの間、池松先生に今回のシンポジストとしてご登壇の依頼をするために沖縄高専に訪問させていただきました。その際、「研究シーズ集」というのを見せていただきました。カラーの冊子に１ページに1教員の紹介をするという見やすい構成になっている冊子です。それを一読すると、「この先生にこんな共同研究の相談してみよう」という気持ちが身近に生まれやすい、と思いました。例えば、名桜大学のホームページには研究者総覧というのがあります。ただ、Web 上提示してるからっといって誰もが見る訳ではありません。そのため、このような研究シーズ集のような冊子を今後、作成し、それをやんばる地域の産官組織に配布できたらいいなというふうに思っております。

次は、地域貢献と研究所の役割ですが、地域からのニーズ、大学や総合研究所に対するニーズは何なのかということについて話します。例えば地域からのニーズというのは、総合研究所を通じての事業の明確化。総合研究所という名称の「総合」の中身が不明というような声がよく聞かれます。なので、もう少し事業内容を明確化できるような形、情報提供の手段を今後考えていきたいというふうに思っています。つぎに産官学連携のための具体的なアクションですが、これは、北部12市町村組合の方から良く聞かれることです。この名桜大学の総合研究所とはどのようなコラボができるのか、どういう専門性をもつ教員がいるのか、など良く聞かれます。これは、「研究シーズ集」の作成およびヤンバル地域での配布によって、大きな一歩を築くのではないかと思っております。

そして、名桜大学の、特に教員から総合研究所にどんな期待があるかについてです。研究所と教員の関わり方が、まだ不明確な部分があります。つまり、今の組織体制では、研究所所員は、全教員を指します。一方、教員のなかには、総合研究所と何ら関わりもない方もいます。そのため全教員を所員として所属させるのではなく、やる気のある人達だけが関わる体制のほうがいいのではと思います。

最後に、総合研究所の目標として「ヤンバルの知的ネットワークのクロスロードを目指して」というようなことを考えていますが、残念なことに教員からの発信には限界があると思っております。つまり、教員の知識も専門も限られています。さらに教員の学外に費やす時間も限られています。学内での業務が沢山あります。授業、講義、演習、各種委員会、会議、等々。そのため、総合研究所は教員が地域に発信する場だけでなく、ヤンバル市民の知識をも活用する場として考える、という発想の転換が必要なのではないかと思います。このアイディアは、実は今年の１月18日に、清成先生に初めて那覇でお会いして３時間半お話をする機会をいただき出てきたアイディアです。清成先生のとても良いアイディアとして、「寄付講座を寄付してもらう」、つまり、お金を提供してもらうのではなく、ヤンバルをはじめ、県内外の市民の中に潜むご専門の方に、「すみません公開講座をお願いし

ます。」「すみません、講師料は払えませんけれども、あなたの知的財産をこちらでシェアさせていただけませんか？」っていうような形で呼びかける。ですから総合研究所というのは、先程申しましたように、知的ネットワーク。色々な人が、外からも関わって、そのクロスロード、交差点の役割をすれば、その限られた財源の中で、色んなことができるのではないかという発想を、清成先生のお話から得る事ができました。ということで、「知の収束、結集する場」として総合の研究所が存在する、というのが、私が考えている結論であります。

目標は「三鷹ネットワーク大学」です。今、清成先生が理事長を務めていらっしゃるNPO法人です。そこに書かれている内容が、三鷹市が市政運営の基本として上げる共同運営の街づくりを具体化する取組みのために設立されました。高等教育機関が持つ知的資源を活用する、という意味で20の大学と90の色々な行政や企業の機関が関わっています。通常、１つの大学に雇用されている教員数は限られています。スタッフ数も限られています。三鷹ネットワーク大学という１つの組織を通じて20もの大学との関わりがあれば、さまざまな専門の方もいらっしゃると思います。そういう方々の知的資源を活用した生涯教育講座を提供しているそうです。色々な知や教養の刺激を受けながら、社会のために貢献するような人材を要請し、その中でも、市民研究者、民間企業、行政関係者という全然職の違う人との交流の場も提供するという意義もあり、この大学があるそうです。

清成先生は、色々な大学の立ち上げに関わってこられた先生です。研究所の設立にも数々と関わられていらっしゃる先生です。先程、お昼の時間にひとつ質問をしました。「先生、今まで色々な大学の設立に関わっていらっしゃったにも関わらず、何故、あえて三鷹ネットワーク大学というのを作られたのですか？」と。そうしましたら、清成先生は、答えてくださいました。「いわゆる高等教育機関としての大学というところからの発信だと、市民、つまりお客さんですけども『これ大学のためにやってるんでしょ？』っていうような勘ぐりもあるし、何か覚めた目で見てしまう所がある。しかし、この三鷹ネットワーク大学というのは、大学という名前ではありますが、三鷹市のある人が中心になって、こういう組織を結成しようよ、ということで、民から話があがった。それに対して色々な人的ネットワークのある清成先生をはじめ、役者が揃っているなかで、その人達の力でできたネットワークの集大成ということで、いわゆる普通の大学とは違うのです。しかし、生涯教育講座を提供してるということで、大学という名前をつけたよ」ということでした。

なるほど、というふうに納得いたしました。

これは、最後のスライドですが、名桜大学総合研究所に「三鷹ネットワーク大学」の経験を生かすとすれば、「ヤンバルの知的ネットワークのクロスロードを目指す」際にも、必ずしもお金がなくてもできるのではないかと思いました。大学からの発信としては、先程ご説明したとおり、教職員の研究内容を研究シーズとしてひろく紹介するということが具体的なアクションとしてできるだろう。それから大学への知の収束としては、寄付講座の寄付、つまり、ヤンバル地域にいる地域の知識人を取り込んでいくというようことで、さまざまな人との繋がりの中で、知を構築していく、もしくは、情報を蓄積していくというようなことをしたいと思っております。総合研究所の２階には、小さいながらヤンバル資料室というのがあります。そちらの方に資料をどんどんデーターベース化していければいいなというふうに思っております。発表の最後に、高等教育機関間の連携の大切さについて触れます。大学など高等教育機関間の人の交流、それから知識の交流というのをさらに深めていく必要もあるのではと思います。高専はロボコンの全国大会優勝などで凄く知られているんですけれども、恥ずかしながら私は、高専を訪れたのが、ついこの間、池松先生に今回のシンポジウム参加を依頼した機会が初めてでした。高専に入って色々と池松先生とお話しすることで学ばせていただいたことが沢山ありました。「灯台もと暗し」ではありませんが、私達は海外とか、県外とか、そういうところには良く目を向けるんですね。しかし自分の足元を、もっともっと知る機会を持った方が、そこでまた、気軽に会える交流の中で生まれてくるものがあるんじゃないかというふうに思います。良く「Think globally, Act locally」といいますけれども、それを是非とも今後、実践していき、そして、総合研究所が、今後いい形で変革していければいいなと思います。そのような思いを込めて、今回、創立15周年記念の事業に、こういった先生方にお集まりいただきました。ご静聴、有り難うございました。

【小川氏】

これで三人先生方の発表、報告が終わりました。これから、自由なディスカッションに入ります。まず最初に、もし宜しければ、清成先生に三人の報告を聞いて、何かご感想があれば、一言頂ければ有難いと思います。

【清成氏】

沖縄大学の発表は面白いですね。緒方先生の話の中に、中村雄二郎という人の名前が出てきましたよね。

中村雄二郎さん、大変優れた哲学者ですけれども、岩波新書に「臨床の知」という名著があります。先程の先生の話というのは、相通じるものがあるんです。で、それは中村先生は近代科学の客観性とか普遍性とか、だから非常に信頼があるということを述べておられます。ですから自然科学が典型ですけれども、無論社会科学もそ

うですけれども、その科学が立派な学問的な体系を持ってる訳です。だけど、現実をみるとね、説明できない事も沢山あるということを指摘されてるんです。現実と近代科学の体系の間には、物凄いギャップがあるということを指摘されていて、そのギャップを埋めるというのは、やっぱり、事実認識、的確な事実認識と近代科学をどう媒介するかという話なんです。それで彼は、「臨床の知」っていうふうに表現してるんですが、こうも言ってるんですね。フィールドワークの知とも言ってるんですよね。だから、現実を見ていって、現実から発見していく。池松先生は臨床のお医者さんではなくて、IPS 細胞で有名な京都大学の山中先生、臨床医だったそうですね。それから、琉球大学にも臨床医からスタートして、遺伝子研究センターに入って、色々な研究してる方がいらっしゃいます。そうすると、やはり、臨床から出てきて、それぞれの基礎と繋いでいくような分野っていうのは、さっき言った、近代科学と現実を繋いでいってるんですね。だから、やっぱり中村雄二郎先生の言うような、「臨床の知」が学問と繋がるということですね。臨床の知という表現を使うと、誤解が生じる可能性もあるんですけどね。医者が臨床で患者を診る時に、基礎医学、生理学に始まり、ずっと背景にあるけれども、しかし診断する時は、現実に患者の身体を診てから、そこで「臨床の知」が生まれてくる。基礎科学の応用ってのはおかしいですけども、「臨床の知」が生まれるみたいに思えてしまうような感じはあります。それは別として、現実と理論との間を詰めていく作業っていうのは、実は大学では意外にやられてないんですよね。体系だけを教えるだけで終わってるんですね。それは、自然科学も社会科学もそうです。経済学なんていうと、非常に抽象的な理論を教えるだけで、体系を教えてる訳ですね。しかし、その体系を構築された前提条件が色々ある訳です。そういうものを皆、無視しちゃっています。ですから、実際上、そういう近代科学、習っても役に立たないということが、出てくる訳です。だから、大学っていうのは授業法は必要ないんじゃないかって気がするんです。それから、ノーベル経済学賞取ったハイエクが言っているわけです。「知というのは、学問的な体系の知と、もう一つは、その場の知という、つまり現場で発見される知があるだろうと、だから時と場所が特定されていて、その場で発見される知っていうのがあるだろうと、on the spot、「その場の知」とよんでる訳ですよね。現実に色々な判断をしていくときに、役に立つのは、on the spot の知の方じゃないかという、こういう指摘もしてるんです。だから、中村雄二郎さんの意見と、皆、一致していくんですね。だからどうも、現実を見ながら理論で媒介していくようなことを、これは啓蒙とは違う、むしろ、新しい発見です。それを、沖縄大学のああいうシリーズを見てると、そこは一貫して通っているんだというふうに感じました。私達が三鷹でやろうとしてることは、まだまだそこまで絞り込まれてないような、まだ途中だということなんですが、我々の場合には、大学のためにやる、大学の行き所のためにやろうとか、そういんじゃなくて、やっぱり社会全体の中で大学を位置付けて、それで見ていこうと。正確には、民、学、産、公といって、官っていうのは止めたんです。ですから、それのやり取りで、構築していくということになるわけです。だから、20の大学が参加しているといっても、大学が組織として、関わってくれているというよりも、例えば、どの大学だったら、この先生というのがいる。そういう、理解してくれて、熱心な先生がいて、そういう先生達の集まりといった方が正確ですね。大学というのが全く理解してくれない場合がある訳です。大規模な大学程そうなんです。大学として理解してくれてないと、法政、明治、立教というのが入ってますけれども、この３大学は大学として理解してないです。しかし、この３大学の先生の中に、もの凄く理解してくれる人達がいて、この人達に共通してるのは、皆、社会という視点から大学を見て、それで市民に接するという、こういう人達なんですね。ですから、そういう人達が、多くなればなるほど良い。

そして、新しい大学が、学長が変わったことによって、三鷹ネットワーク大学を再認識されて、接近されてきているのが、嘉悦大学で、加藤寛先生が80を超えて学長になられて、大学が一変したんです。それでその加藤先生は、嘉悦大学というのは花小金井という住宅街にあるのですけど、学生達を地域に出しちゃうんです。商店街でも地場産業でも何でもいいから、学生を出して交流させて、自分達の立ち位置を認識させるんです。そしたら、この４月から、もう一つ例をあげますと、大学が一つもなかった、足立区にある東京未来大学という変な名前の大学が、そこに、モチベーション行動科学部っていう学部ができたんです。何だか分からないですよね。ところが、日経新聞に紹介がでたんです。極めて、明解なんですね。学生達に、やる気の研究、ホームページ見たら「やる気の研究」って載っているわけですけれども、結局、進路も分からない。何を勉強していいのか分からない。学力がそんなにある訳でもない。自分達どうなるの、と。だから、入学しても退学する学生が多い大学が随分ある訳です。ところが、そういう子供達に向けて、「やる気の研究」ってのをぶつけたんです。提案したのは、理事長とリクルートから来た理事なんです。二人が私の所にその説明にやって来たんです。それで、「モチベーション学部」というので文部科学省に申請したんです。そしたら却下されたんですよ。モチベーションなんていうのは学問じゃないって言われたそうなんです。動機付けですから。それで、学問にするにはどうすればいいか

と考えて、「行動科学」ってのがあるから、くっつけて、いい加減な話です。それで認められちゃったって訳です。ところが、昨年の暮れ辺りから、学生の面接を始めてるんです。AO 入試なんかで。そうするとね、非常に出来のいい子が来るんですって。やっぱり、学生達は皆、モヤモヤしてるんです。これからの世の中がどうなって行くのか分らない。どう生きていいかも分らない。誰も教えてくれない。それをこの自分達が探すのを大学がバックアップしてくれる。そういう大学だと思ったわけです。教育学と心理学と経営学と、三つそのオーバーラップしたところで、カリキュラムがあるんですね。これ恐らく、どうなるか分らない大学ですけれども、分らない学部だけれども、学生のほうがかえって興味持ってくれたというので、むしろ学生達が、多分、新しい学部を作ってくんじゃないかと思うんです。学生と教員の、そういう実験じゃないかなと思って見てるんです。

発案者はリクルートの社員から理事になった人です。200ぐらいの大学を回ったそうです。個人的な大学観というものの見方を持っていて、それをベースにして提案したらしいんですね。ですから「そんなものは、くだらない」と言って、弾いちゃわないで、やっぱり見ていく必要があるんだろうなということです。それからその大学は、クラス担任制なんです。クラス担任は教授じゃないんです。職員なんです。それが面白いんですね。クラス担任の仕事は何かといったら、生活指導と進路指導なんです。それが背景にあって、それで自由に学問させるような仕組みを作ったということなんです。だから、これからどうなるかなと、多分そういう仕組みを採っていると、中途退学はないと思うんです。これからの結果を見るということで、私は楽しみにしているんです。それ以外に、三鷹と比べたら進んだ例が随分あちこちに出てきてるなという感じを持ちました。

【小川氏】

どうも有り難うございました。先程、土曜教養講座に対するお褒めの言葉がございましたが、緒方所長、いかがでしょうか。

【緒方氏】

いや。何か、買い被られ過ぎみたいな気もするんですけども。実は、あの、極端な例で客が500人入る時もあるんですが、だけど、これは一つの例として笑っていただきたいので、話題を提供しますけども、「禁煙講座」をやったんです。「山代先生の禁煙講座」。そしたら、僕、言われたんですよ。「煙草を吸う人は来ません。吸わない人は来ません。従って、誰も来ません。」と。本当に、職員８人でお客さんが２人で、そのうちの一人は私が連れて来てという感じで・・・。また、客が10人っていうこともありました。それを一々土曜講座ってカウントするのかと言われると、困りますけど。実は土曜講座は500回を数えるんです。量が重なれば、質に転換するということもありうるってことですね。それだけ繰り返し繰り返しやっているとやっぱり、何というか、500回だと言ったら、わっと、これやりたい、あれやりたいと、他の大学からもくるんです。是非、土曜講座でやってくれと。大臣に話しつけるからとか、こっちが、ちょっともう出来そうにないようなことも含めて・・・。昨日、その整理をしたんですけど、もう身の丈に合ったことをやっていこうと思いました。500回記念大会は、那覇市民会館とかで1000人規模でやろうとか、台北でとか、福建省でとか色々考えてました。何百万円か寄付を集めて。でも、もう止めました。小さく、引き続きずっと、恐らく100人も集まればいいかなというつもりで、色々なこと、共同研究班なんかの発表とかですね、そういうふうにして、やっていきたいなと思っています。

ただね、市民向けには非常に宜しいんですけど、学生が聞きに来ないんですね。だからこれが大問題なんですよ。学生に是非、聞かせたいと思ってるんですけど、「土曜講座に出たら補講の代わりにするとか、出席にする」とか、色々やっているんですけど、なかなか学生が来ません。これが大問題ですね。

【清成氏】

北欧というか、ノルウェー中心に、デンマーク、スウェーデン、イギリス、ドイツ、この五ヵ国の10ぐらいの大学が参加したNMUっていうのがあるんですが、Northern Maritime University と言います。だから、北方海洋大学と言ってる。これもネットワーク大学なんです。結局、北方圏の水産業とか、それのロジスティックスとか、それのマネージメントとか、色々なものを含めてるわけですけど、各国に専門家がぽつんぽつんといても、トータルのまとめ役というのはいないわけですね。それで、EU のプロジェクトでその10大学ぐらいが集まって、ネットワーク大学ができて、カリキュラムを見てみると、偉く良くできてます。じゃ誰が、事務方やるかっていうと、事務局をドイツのリューベックの小さいシンクタンクに任せてるんです。それで今度は、そのシンクタンクを調べてみたら、例えば、水産業クラスターみたいな、リューベック市が計画しているクラスターのマスタープランなんかを作ってるんです。わりと広域的に研究してる、そういうシンクタンクなんですね。それが、やっぱり EU から補助金を貰って、広域的な視点から、必要なこと、ニーズを見つけ出して、やってるわけです。そして、リューベックにある地元の大学が、やっぱり、一番コミットしています。それで、リューベックの人口を調べたら、21万人なんです。

石巻と女川と東松島という１つの経済圏で、人口が21万人なんです。それで石巻の人に、「これどうだ」と言ったら、大学さえその気になってくれればと言うんです。だから東北大学もあるし、東北学院もあるし、東北福祉大もあるしですね、だけど誰も音頭をとる人がいない。だからもっと広く岩手大学、北海道大学などを全部ひっぱり込めばできるはずだけど、そういう声が、東北の復興では全然、出てこないというんです。非常に残念ですね。そういう試みを調べたら、恐らく、世界各地にあるんじゃないかと思います。

【緒方氏】

清成先生の音頭で、４大学の連携 GP っていう補助金を私達が頂きまして、一千何百万円、毎年、三年連続で貰った訳ですけれども、そこに参加したのが札幌学院大学、法政大学、高知工科大学、沖縄大学でした。街づくりのために、学生をどうやって教育するか。街づくりのためには街を知らなきゃ駄目ですね。例えば、インターンシップであるとか、全部、外に出ないと話にならない。ということで強く主張して、例えば、各大学が、沖縄大学に学生を送ってくる。沖縄大学は札幌学院大学に学生を行かせる。法政大学にも行かせる。高知工科大学にも。それはお金があったからできたことですけどね。それの蓄積はやっぱり、これから生きてくるんだろうなと思います。

もう一つ、大学の関連で言いますとね、やっぱり大学というのはなかなか容易ならん所だと思ったのは、沖縄大学の場合、小さなとこですから、この科目をちゃんと修めて、例えば私がやってる「マスメディア論」も含めて、街づくりだとか、色々なものがあります。さきほどの「地域幸福論」もありますけれども、それを24単位取った学生は、副専攻ということで、学長が修了証というか、副専攻の証明をあげました。それを、同時に４大学の修了証にしようと言ったらね、驚いたことに、他の大学はそれが全然、駄目なんです。特に、法政大学は、大きすぎて、「今からそういう根回しは全く不可能です」と言ってました。多分、３年前にやっていても恐らく不可能だったんでしょう。そうすると、沖縄大学というのは小さな所で、これ取ったら副専攻ということですよって言ったら、あぁそうですかって皆通っちゃった。ですから、学生にはメリットなんです。

何か、沖縄大学が一番簡単で、高知工科も札幌学院も理事長が言うもんだから GP を取ったみたいな状態なんです。その辺が、民間だったら容易に変わるっていうか、制度をさっと変えなくちゃいけないというか、ちょこっと変えただけでできることが大学ではなかなかできない･･･、その辺が、大学の性格を変えないと、今の時代に対処できないという危機感を持ってるんです。どうも皆さん危機感が薄いのではないか。特に、沖縄大学は、一方ではこういうふうな社会的に開かれた土曜講座をやりつつ、そこに学生が参加しない、職員も参加しない。地域研究所だけがやっている、ちょっと危機感を感じます。

【小川氏】

有り難うございました。基調講演およびシンポジストの先生からの色々なコメントがありましたが、海上の参加者から質問や意見がございましたら、挙手をお願いいたします。

【名護市役所職員】

私は、名護市役所の人事行政に勤めています。今のお話の中で、民と産、学の連携のときに、それを、取り持つコーディネーターというのが、どこに所属するべきなのかという点を質問します。またそのような情熱を持った方をどう育てて行くのかという点で何か提案がございましたら、お聞きしたいのですが、よろしくお願いします。

【小川氏】

今、二つ質問があったと思うんですけれども、産官学もしくは、清成先生のお言葉を借りると「民、学、産、公」ともいえますが、それらを取りまとめるコーディネーターというのは、どこに所属するどういう立場の人なのかという質問と、そういう立場に立つ人、やる気のある人を育てるには、どのような仕組みを作って行かねば行けないのかという二点の質問に対して、清成先生、よろしくお願いします。

【清成氏】

そうですね。所属はどこでもいいんですね。たまたま、民の方に、そういう適した人がいたとか、行政の方にいたとか、あるいは商工会にいたとか、それは、たまたまなんです。三鷹の場合は、今の三鷹の市長が三鷹生まれ三鷹育ちで、三鷹にあるルーテル学院大学の教授だった人なんです。その人は、八王子にある東京工科大学の教授に移って、学部長までやった、なかなか積極的な女性なんです。その人が、市長になった訳ですね。だから、元々、現市長にそういう素質があったというか、そういうことを良く理解する人が市長になったということですね。市長に立候補する時に、私の所に電話を掛けてきて、「今度、立候補しますから、応援して下さい」という、「あぁ応援するよ」と言って、というのはですね、彼女達とは随分、色々なプロジェクトで一緒で、色々知ってましたからね。そしたら、ある市民の提案で、こういうネットワーク大学作ってほしいというので、市長と私で相談してということになったわけです。だけどやっぱり取りまとめる場合には、市長や私が何か言っても、事務

局でしっかりした人がいないとなかなか難しいですね。

それから、三鷹市には大学が４つあるんです。これは国際キリスト教大学、杏林大学、それから、ルーテル学院大学と。それと、東京天文台なんです。東京天文台は大学院教育をやってるんですね。その他、専門学校が１つと、中東の研究所があるんです。そういうのが、皆、コアになるというのと、隣接した調布、府中ですね。小金井、武蔵野。そこに、農工大とか、電通大、それから、法政、亜細亜大学があるわけです。それから東京女子大。そういう所の学長に一挙に相談して、やろうって話になったんです。これは日本 IBM が毎年、学長会議ってのをやってるんです。これは、天城で合宿してやるんです。今言った大学の学長が毎年出てきて、皆仲間になっちゃって、しょちゅう議論してる連中なもんですから、それで、「やろうか」って話になって、簡単に、理解ができちゃった。大学は取りまとめをほとんどしなくて、意思疎通ができた。そうすると、コアになる職員どうするか、三鷹市がスペースを用意してくれることになって、結局、NPO 法人の会長を私がやることにして、副会長は、国際キリスト教大学の学長がやることになった。そして、コアになる職員は、三鷹の市の職員の中で、法政出身と ICU 出身の職員をそれを出してもらったんです。この連中が非常に質の良い職員だったので、すぐ理解してくれて、この二人が走り回ってくれた。

もう１つはね、教育長がなかなか優れた人なんです。三鷹市で教員採用が決まった大学の新卒の研修をネットワーク大学でやってくれないかという訳ですよ。場合によっては自分自ら喋っても良いと、やっぱりこの人の存在も大きかったですね。だから、市の職員研修もやる、それから市のシンクタンクとして政策提案もやるというようなことをやりました。それから、市民の生涯学習だけではなくて、市内に事業所のある企業を、病院とか色々ありますね。そういうとこの職員を全部、受講の資格があるということにして、それから、近接の市なんかは、どうぞ自由に参加して下さいと言って、あまり煩いこと言わないで、私はすぐ隣の武蔵野市に住んでましたから、私の家内なんかは、市が違うけど平気でパソコンの講座なんか顔だしてるわけです。だから、割とオープンな形でやってます。ですから、市も応分の負担をしてくれてるんです。職員を派遣してくれてるっていうのと、それから、市の研修だとか、シンクタンクの役割を果たしてますから、市も応分の金を出してくれる。大学の場合、今、第三者評価が義務付けられてますね。そうすると、我々も NPO だけれども、やっぱり、ガバナンスっていう点で第三者評価必要だろうということになって、市から金出してもらってるんだから、市会議員にチェックしてもらおうという意味で、自民党から、民主、共産、公明の市会議員による評価委員会があるんですよ。そこで質問が随分あって、単なるガス抜きではなく、市会議員も勉強してくれるんですね。一番傑作だったのが、民主党の市会議員が、受講生になってくれて、しかも最後には民主党を辞めちゃったんです。そういう人もいたぐらいだから、割と行政だけじゃなくて、議員もコミットしてくれました。そういう事があって、皆、１つの面識集団として動き出したら、大体、ほっといても、まとまっていくもんだなと思っています。

本来ならば、大学の人っていうと、変わり目に動くということが難しいという、運営がね。そういう世間相場があるかもしれないけれども、だけど、各大学で熱心に協力してくれる先生達が集まってくれるんですね。そういう心配は全くないしね。批判者なんかは、最初から来ませんから、それはもういいわけです。ですから、それで自然に20大学まで増えていった。それから、三鷹市内に独立行政法人が二つあるんですが、航空機の研究やってるとこや、そういうところが全部、会員になってくれました。そういうところから講師も当然出てきますしね。それから、医師会だとか、商工会、それから、三鷹市内に支店を持ってる銀行証券、そういうところまで入ってきてもらってます。それから、市の三セクで「街づくり三鷹」ってのがあって、これは、SOHO スモール室、創業支援をやってるんです。ここはもう相当実績あるんですけど、そこの人達もどんどん入ってきます。だから割合、双方向で交流している状況です。それから、三鷹の商工会の中に、観光部会ができるとかですね。三鷹で何観光するのかよく分らないですけどね。そうやって、できたものが集まってくる。それから、三鷹の天文台でですね、天文台が考案して、科学技術のイベントやるんですね。そういう時は、元運輸大臣の有馬さんに会長になってもらって、割と信頼があって人が集まるとかですね。そういうようなことで、外の人材を色々活用するというようなことをやって、だから何か、特定の人がコーディネーターで引っ張っていくというよりも、割合、協力する体制ができてます。ネットワーク大学そのものが、６年経っていますし。

だけど、煩い市民がいて、「ネットワーク大学なんて、大学でもないのに、大学を名乗るのは何事だ」と、「学校教育法に違反じゃないか」という人がいたんですよ。その人、調べてみたら、文部省の元生涯学習局長だったんです。それで、副市長がその人のところ行ったら、けしからんと叱られたわけですね。それで、副市長が文部科学省に行って聞いたら、文科省の担当者は「三鷹ネットワーク大学推進機構」といっても、普通のその辺の大学と混同する人はいない、だからそういう名称を使っても構わないという返事でした。日本中に沢山ありますという訳ですね。その旨、元生涯学習局長に報告にいったら、「今の後輩はけしからん」とか何とか言ってました

けれどね。だけど、その人だって講師お願いしますといえば、引き受けてくれるわけです。ですから、色んな人を次々に巻き込んで行くような動きになったんですね。だから、人材育成もそういう中で、達成経験というんでしょうか、職員が色々な企画かなんかで関わることによって、人脈もできていくし、それで、自己形成的にやっぱりできてくるんですよね。だから、初代の事務局長が、その後、市に戻って、他の部局をずっと回って、定年で引退した時に、その人を専任の事務局長で引っ張ってきたんです。ノウハウを持ってますからね。だからその天下りじゃなくて、ちゃんとやってくれるわけです。そうやって育ってきた人が、今コアになってきているということです。だから計画的に人を作ってくような動きに入ってきてます。ですから、今の問題は、いつ私がさっさと辞めるか、皆に辞めてくれと言われる前に辞めるということなんだろうと思います。

【小川氏】
清成先生、有り難うございました。清成先生のご経験では、最初は、三鷹市の職員の方がコーディネーターを務めたとのこと、そしてその方がちょうどその三鷹市内にある大学の出身者だったということで、凄く巻き込みやすかったということです。それぞれの立場の方が、凄く熱心に動いてくれた。その経験の中で、だんだんと人が育っていくのは、議員さんも含め、色々幅広い人々と関わることができたということです。やはり、名護市の場合は、名護市の職員の方が中心になってコーディネートを進めるというのが回答なのかもしれませんね。それから、名護市の場合、名桜大学出身者が職員にいれば、その人材をうまく求心力として活用していければ良いのかなというふうに思いました。

【名護市役所職員】
清成先生有り難うございました。トップの情熱というのは必要なのかなっていう気がしました。市長であったり、教育長であったり、大学の学長であったりですね、やはり、その熱意が部下に繋がるのかなって気もしました。

【清成氏】
余計な事を言うようですけども、全くその通りでね。だけどトップが突出すると、叩かれたり、色々、根回しがやりにくくなるんですね。それで、私なんかが考えたのは、前市長です。前市長が80才を超えた方ですけども、市の職員から市長に上がった人でね。なかなかの人物なんですよ。地味な方ですからね。あの何ていうんでしょうかね。あまりメディアには載らないけれども、実力者なんです。その人を第三者評価委員会の会長にお願いしました。それから、ネットワーク機構の会長っていうことで、お願いして、何か、根回しするときは、その人に頼んじゃおうと、そういうことを裏でやらないと、地域は色々な団体もあるし、色々な人がいますから、そういう人を活用するというのは一つの方法じゃないかと思います。三鷹の場合、人口17万人ですから、そんなに、大きくもない、小さくもないという、ちょうどやりやすい人口規模だった感じがしますね。

【名護市役所職員】
色々テクニックまでご指導いただいて有り難うございました。

【小川氏】
今の話を聞いてますと、トップに立つ方が、だれがどのような役を演じられるのか、それぞれ部下の役者としてのどう生かすことができるかということを知っているということでしょうか。どの人にあたれば、こういうことは解決しやすいかということも大事なことかなと思います。

【仲地氏】
前所長の仲地です。所長に就任したときに考えた事がありました。いわゆる、南の沖縄大学に土曜講座があれば、北の名桜大学の方にも土曜講座があってもいいのではないかということで、試みたことがございます。北と言っても、色々なヤンバルの自然等と題材もいっぱいある。そういう中で、色々なプログラムをやってきた訳ですが、継続性がなかったという反省があります。私の後の所長が公開講座等で成功している感じはしますけれども、今、考えますと、要するに、北の土曜講座が成功しなかった理由と致しましては、一つは、いみじくも緒方先生が指摘された所の、学内の先生方の参加がなかなか得られなかったということ。二つ目は、大学の学生さんの参加がなかなか得られない、出席が得られないということです。また、土曜にやろうとしたところ、土曜にわざわざ出てくる方々が中々いないということです。そして第四の理由と致しましては、那覇だと街が大きいということもあって、参加者がいると思いますけれども、名護では人口も限られているし、その参加者、関心のある人も限られているということで、なかなか集まってもらえなかったということ。

そこで一つ、今でもドリームなんですけど、南に大きな土曜講座があれば、北にも、やはり市民が来て、北の土曜講座を受講するということがあればいいなと思ってましたが、なかなかそれができなかった。

そこで緒方先生への質問は、継続性のコツですね。コツを教えていただきたいというのが一つ。もう一つは、

大学の先生方の教養講座との関係をみますと、地域貢献とか言われていますけれど、大学の先生方にとっては、要するに元来、論文を書くことにとても忙しい。今でも繰り返しドリームがあるのですが、沖縄大学が500回、講座を開講してこれたコツを教えていただきたいと思います。

【緒方氏】

なかなか難しいんですけどね、今、ご説明をしなかった一つがですね。共同研究班は15ぐらいありまして、教員だったら誰でも手をあげられるんですけど、それがですね、これだけ欲しいって皆くるんです。全部足し合わせると900万円ぐらいなるんですよ。それで、予算は300万円しかありませんと言って、３分の１に切って、50万円希望の人は15万円とかそんな形でやっていただいて、実はその発表の場は本当は土曜講座でどんどんやってもいいんですが、研究発表は、学生に還元する形で、月曜日の夕方の時間に設定した講座でやっています。もちろん市民も参加できるように、その時間にしたんですけれども、沖縄先端学講座ということで、15回。ちょうど大体、共同研究班が15班あるので一つずつ発表していきます。教員の中には「世の中がどうなっているか知ったこっちゃない」と言う人がいます。ただし、研究班には沖縄にちゃんと関係のあることをやって下さいということで、縛りを掛けていて、もちろん色々なことが関連していくわけですけど、そこに、軽重の差を付けるというのは難しいんですよ。この人の研究費用の60万円がこの20万円とどう違うかとかですね、結論出てないんです。ですから、教員の共同研究は、最低、必ず次の年の講座に講師としてオムニバスで出て下さいと義務付けております。

私は、土曜講座はもっぱら市民向けでいいんじゃないかと思っておりまして、大学の教員の発表は、教員が研究するのは当たり前ですからね。研究しないっていったら、単に怠惰ということですので、それを一々土曜講座で発表するまでもないだろうと・・・、それが余程、「対外的にいって面白い」って言ったら、語弊がありますけれども、一般の方の興味を引くようなことであれば、是非、土曜講座でやってくれということで、実は土曜講座だけが突出してるような感じですけども、土曜講座の他にも、色々な土曜講座と称していないんですけど、土曜日にめじろ押しでやってるんです。恐らく那覇で一番、客が集まりやすいとか、会場費も安いとかですね、色々なことがあるかもしれませんけど、何でしょうね、やっぱり、分りません。そういう、ニーズがあるだろうと信じてやってる訳です。

今年のものでも、30人しか集まらないこともありますし、100何十人も集まることもあるし、それから、タイムスとか新報で大きく採り上げられて、連載されるのもあるし、ほとんど話題にならないものもある。土曜講座じゃなくても、例えば、国際関係で40人、50人の海外からの研究者が来たこともありました。それが一切マスコミに載らない。何しろ場所がいいと言ったら何ですけど、特に最近ですけど外からの開催希望が多くございます。場所を提供するだけでも大変。市民でもやっぱり、大学に対する期待というものは、高いんじゃないかという気が致します。必ずしも沖縄大学に対して高いということよりは、場所がいいというか、そんなことで来ているのかなって思います。それと土曜講座が相当広く浸透してると思います。こういうことを言えば大学でやってくれるんじゃないかってですね。私も電話を取ったりするんですけど、「うちの孫娘が咳が止まらないけど、これはどうしたらいいか」。「すみませんけど、そういうことはできません」とかね。例えば「私の先輩の何とか教授が退官するんだけど、記念講演をここでやるべきだ」とかですね、色々なことがあるんですね。お断りしてるケースも結構あります。

逆に言えば、やっぱり、ニーズがあるところをもう少し開拓していくべきではないかと思っております。尊敬する清成先生から「臨床の知」という僕も10数年前に読んで、盛んにその言葉を使ったんですけど、つまり、現場で得られる知識というのは、だんだん構築していって、何かのことにしない限り、学問もやせ細ってしまう、果たして大学はそれをちゃんとやってるのかというのが、僕の耐えざる質問です。

【小川氏】

仲地前所長、宜しいでしょうか。

【仲地氏】

はい。「臨床の知」、良く分りました。

【小川氏】

では、最後の質問とさせていただきます。

【一般参加者】

本日は、大変貴重なお話を有り難うございました。私、５年前に東京からこちら今帰仁村に移住し、ヤンバルの良いところと悪いところを含め、地域の色々な所を色々と見てるつもりです。それで、私も課題を色々考えています。今日のテーマは地域貢献に対する大学研究所ということですが、地域貢献って何かって考えたら、地域の人々が幸せになることかな、と考えています。それは、ゆとりという金銭的なもの、それは地域活性化でお買い物とか、知とか、感動とか、色々あると思うんです。大学研究所に望むことは、知的ネットワークのクロスロード化ってことで、「知」っていうところが一番強いと思

うんです。

私は東京にいたときは、色々な異業種交流会とか、早稲田大学の講座とか、色々な所で人と接する場所がいっぱいあります。それがこっちは少ない。大学という場所は人と人を繋ぐってことで、コネクション、コミュニケーション、そこからコラボレーションっていう共同が生まれるようなものを作って欲しいなっと思っています。あと、シンクタンクっていうことで、ちょうど私も色々、簡単なコンサルタントもやってたのですが、シンクタンクっていうのは大手のコンサルタントにもありますが、「知」というものに限っていえば、大学で教える機会や、学生を使って地域のコンサルタントをするというのも一つのアイディアと思います。

もう一点、先程から色々講座の話が出てますが、現在、学生のみならず先生たちも全然、本を読まないのが事実です。本を読む機会がない、本を読む喜びっていうのがないと思います。そういうのを浸透させていく、高校生の親を見てもやはり、今の生活で目いっぱいで、全然、活気がないというか、本当に子供に何か教えるということもできない状態なんです。そういうきっかけ作りの方を、大学研究所でやって欲しいなと思っています。

あと最後に、大学の就職率が悪いため、高校生に「就職」を勧めているのが事実です。私も最近、本で読んで、秋田にある国際教養大学が凄く就職率が高い。本当に、ニーズに合った人を育てるってことで、厳しく指導する。多分、名桜大学も色々考えていると思うのですが、今は本当に大学行けば良いっていう学生は本当に安易なんです。AO 入試と推薦で簡単に入れるので、高校生は簡単に大学行こうと思ってます。大学側でもっと厳しく勉学に励まさせ、そして、就職の指導してほしいと思います。その為にも、地域の活性化で新しい事業を開拓することなどを大学から進めていただければいいと思います。

【小川氏】

ご意見並びに、大学に対する叱咤激励、有り難うございます。

では、そろそろ時間になりましたので、最後に報告をして下さいました、３人の先生方には現所長として、もしくはセンター長として、今後こういうことに取組みたい、と思っている「チャレンジ」の部分を一言ずつお話していただければ有難いです。

まずは、私から。先程から何度も繰り返しておりますけれども、名桜大学の総合研究所を「ヤンバルの知的クロスロード」としたいと思っております。そのためには、大学内のリソースのみならず、ヤンバルに点在するさまざまな知的リソースもどんどん巻き込んでいければと思っています。

では、緒方先生よろしくお願いします。

【緒方氏】

僕は、定年まで後一年なんですけど、すでに、NPO のある理事長で来てくれという話があって、もちろん自分で稼ぎながらやらなくちゃいけないんですけど、僕が果たす役割、沖縄に限らず色々なアジアの色々な所と繋ぎながら、僕も沖縄にずっとおりますので、さっきおっしゃったコラボレーションとか何かを全部大学が一つでできるはずはないので、その辺をサポートできるようなことができればいいなと思っております。大学というのは不思議なんですね。外での活動をしてても、どんどんやれってこともないし、辞めろってこともないし、自分の努力だけでやってるみたいな、不思議な所だなと思いつつ、次の色々な手を打っていこうかと思っております。

【小川氏】

有り難うございました。では、最後の締めに池松先生、よろしくお願いします。

【池松氏】

地域も含めて、今、若い子達の人材育成みたいなことに、最終的には繋げていきたいと思っています。

先週の金曜日から今週の水曜日までシンガポールから40人の学生を受け入れて、バイオテクノロジーキャンプっていうのをやったんですけれども、うちの学生には英語漬けになっていいかなと思って、その位の動機だったんですけれども、実際やってみると、本当に、テーマはシンガポールと沖縄の文化の差みたいなものでやったんですけれども、非常に学生も感動して、最後にお互い抱き合って泣いてたみたいな感じで、こういうのを名護青年の家とか生涯学習推進センターの場所を借りて市民の方と、(民がないと駄目だって話だったんですけど)、市民の方に入ってもらって、そういう異文化交流みたなのを普通の現実としてやっていけるような、国際的な視野が広がりますし、外国語教育にももちろんなりますし、何よりも知らない人と、どういうふうにコミニケーションとって友達になっていくかっていうことが一番大事なんじゃないかと思うんです。そういうことに挑戦していきたいなと思っています。

【小川氏】

どうも有り難うございました。これで第二部のシンポジウム及びディスカッションのセッションを終わらせていただきます。では、総合司会者にマイクを渡しします。

【司会：田代氏】

パネリストの先生方どうも有り難うございました。会場の皆さん、長時間、有り難うございました。それでは、本日のシンポジウムの終わりに当たりまして、最後に閉

会の辞を名桜大学の瀬名波学長の方からいただきたいと思います。宜しくお願い致します。

【瀬名波名桜大学長】

本日は、名桜大学の総合研究所15周年を迎えるにあたりまして、記念シンポジウムを迎える事ができましたことをこの上なく嬉しく思います。大学を代表致しまして、パネリストになられました、あるいは、基調講演をなさりました清成先生、それから池松先生、それから緒方先生、本学の研究所長小川先生。それから早稲田大学の稲福先生に心から感謝申し上げたいと思っております。

名桜大学の設立が1994年ということでございますけれども、開学と同時に真っ先に何をすべきかということについて、我々は色々と検討いたしました。それで、東江初代学長の方から、将来計画委員会を設置してもらいまして、そちらに二つの諮問をしたわけです。その一つが、研究所の設置ということであったわけであります。付属施設として、最初にできたのが、総合研究所であったということであり、大学として当然のことではなかったかと思っております。次にできましたのが、大学院、国際文化研究科ということで、この二つが先程、小川先生が話されましたように、密接に結びついていました。大学の創設当時に、この二つを成し遂げたということであります。清成先生におかれましては、大変お忙しい中、このような時間を取って下さいまして、大変恐縮しております。有り難く思っております。皆さんもご存じだと思いますけれども、法政大学の総長をなさっておられましたし、沖縄研究所を最初に日本で立ち上げられた大学であるということであり、我々にとりましても、非常になじみの深い法政大学であります。ただ、それだけではありません。沖縄研究所の所長をされた外間守善先生が、名桜大学の創立に関わっていらっしゃるということもありまして、外間先生のお考え、法政大学のアイディアがこの名桜大学の在り方に反映されているということを申し上げておきたいと思います。

それから、沖縄国際センター、JICA ですね。初代所長でいらっしゃった小沢先生も大変ご協力して下さった。また、小沢先生は、本学が大変困っている時に、法政大学出版から出されました貴重な図書を沢山送って下さいました。ここで、改めて御礼を申し上げたいと思っております。清成先生は、本日は非常に、俯瞰的な視点から高等教育が直面している諸問題についてお話をして下さいました。少子化問題、高齢化問題、それから学生のユニバーサル化、そういった問題を取り上げて下さいまして、今我々がどのようにこの問題に、ぶつからなきゃならないのかということを教えて下さいました。しかも、過去にさかのぼって過去を眺め、振り返り、それから、現在を熟視し、それから、未来を展望するという三つの視点からいろいろとお話をして下さったわけでありまして、我々大学の運営、あるいは、大学の研究所の運営に大きな示唆をあたえて下さったということであります。それから、沖縄高等専門学校、それから沖縄大学の研究所の在り方、あるいは実践、それにつて、ご報告して下さいまして、我々大変勉強になりました。本学の研究所の規程によりますとですね、研究所はまず、国内外の研究所との交流、それから共同研究を推進すると言うことが謳われているわけことです。にも関わらず、この15年間で、国際交流はあったわけですけれども、しかし、このように県内における研究所の交流ということが、今まで一度もなかったということであり、15周年を記念するのに、とっても相応しいものではなかったのかと思っております。それから、稲福先生におかれましては、貴重なコメントをして下さいまして、大変勉強になりました。特にヤンバル地域とは、中部南部と異なってるというところがあります。組踊りのお話がありましたし、それから考古学の面からの研究が豊富にあるというご指摘がありました。その他ですね、北部の地域は、地質学的にも異なっていて酸性土壌なんですね。中南部の方がアルカリ性ということなどもありますし、新しい文化が育まれるんじゃなかということで、大変力強いご指摘をして下さいました。

そういうことで、本日の15周年記念シンポジウムは大変成功だったと、私は考えておりますし、忘れることのできない記念すべきシンポジウムであったということであります。改めて、清成先生、それから池松先生、緒方先生、稲福先生に対しまして衷心より感謝を申し上げたいと思います。それから、フロアの皆さん、もっともっと時間があれば、活発なご意見が、あるいは、ご質問が出ていたんじゃないかと思いますけれども、時間の許す限り、ご質問を受けまして感謝しております。先程、ご質問がございました、大学の地域貢献ということについて、管理運営する方がいないのかというお話がございましたけれども、実を申しますと、大学の方では地域貢献センターというのを立ち上げまして、そこで、単に大学から一方的に情報を発信するだけではなく、地域の方から、地域のニーズを確かめ、あるいは情報を得るいう意味で、北部広域圏の事務所の方と、今、お話をしているところなんです。先程のご質問に対して早めに答えることができるように、持って行きたいと思っております。それでは、今一度、大きな拍手でもって先生方に感謝の意を表したいと思います。

【司会：田代氏】

瀬名波学長有り難うございました。これをもちまして、本講演及びシンポジウムを終わらさせていただきたいと思います。お疲れ様でした。